

2008/9/13(土) 午前 10:25

無題

練習用



0





写真: 上から、テレジン記念館、ゲットー博物館、子供たちの絵4枚

【TEREZIN MEMORIAL(テレジン記念館)】

午後に最初に訪れたのが、ゲットー博物館です。
向かい側には緑豊かな公園があり、そこでピクニックのようなランチタイムを過ごしました。

低い柵と緑の木々に囲まれた薄黄色の壁と茶色の屋根の2階建ての建物は、チェコの悲しい歴史を知らなければ、一見、可愛い印象を与える佇まいです。

この建物は、子供のための施設だったそうで、1階の展示物は、子どものが収容所で描いた絵や詩などの芸術作品が展示されていました。(テレジンの収容所は世界への宣伝目的の役割も果していた収容所だったため、芸術活動が許されていました。)

絵は、黒や赤が多かったです。暗い印象を与えるものが多い中にも、自然の花や蝶の絵、「夢」や「昔の生活」と題された絵には少し明るい配色のものもあました。
その絵は、みんなで食事をしている様子やクリスマスツリーなどが描かれていました。どれほど子供たちの心の傷が深かったか、という現実と、それでもわずかであれ消えない希望が目の前にありました。

作品の中でも特に印象に残った詩がありましたので、紹介いたします。Frantisek Bassという名前の男の子の詩です。

A little garden

Fragrant and full of roses,The path is narrow.

And a little boy,a sweet boy,

Like that growing blossom.

When the blossom comes to bloom,

The little boy will be no more.

小さな子どもが自分の死や喪失について悟っていたかのような詩です。
事実、ほとんどの子供達が、このテレジン収容所からアウシュビッツ、ビルケナウなどに送られ殺されていました。
このような詩や他の子供たちの絵から、当時の悲惨な状況と子どもの強さを同時に感じました。

二階には、ナチス台頭の歴史から終戦までの歴史が写真つきで展示されていました。ナチスが計画的に、詐欺的に、作り出した偽りだらけの「ユダヤ人問題の最終的解決」により、多くのユダヤ人、また、平和を願い活動した人々が亡くなりました。
そのような悲惨な状況に懸命に対抗しようとしていた人の中でも特に精力的に活動していた有名な人についても写真付きで展示されていました。また、音楽家などの遺品の数々も展示してありました。
その他、売店には本やCDやビデオなどが売っていました。

【GETTO MUSEUM】

道なりにまっすぐ歩いて5分くらいの場所に次の見学施設がありました。

まず、2階にあがると、被収容者が収容されていた室内の様子が再現された部屋がありました。
先に進むと芸術作品が展示されている部屋があり、風景画や人物画などリアルで本格的な絵画がずらりと並んでいました。中には、フランクルがこっそりウィーンに持ち帰ったという絵*を描いたOtto Ungar の作品もいくつか展示されていました。
(*この絵の中に描かれている棺の一つの前でフランクルは最後に父とお別れした。「人生があなたを待っている1」P.194参照)

ところどころに壁に展示しきれないものがファイル閉じされて机の上に置かれており、ゆっくり座ってみるようになっていました。

また、音楽関係の展示物もあり、収容所内で作曲・演奏したであろう作品も展示されていました。

その他、収容所内で演劇をした時に用いた衣装なども見ることができました。

そこでみた数々の芸術作品は、過酷な状況の中、それでも人の心の豊かさは失われず、表現することができるものなんだと教えてくれました。そして、見る者の心を豊かにさえしてくれました。

※テレジン記念館の中は撮影禁止ですので、お見せできないのが残念ですが、記念館の正面や売店で買った子供の絵を絵葉書にしたもの等を写したので、ご覧になって下さい。(A.S.記)



写真: プラハ市内のビヤホールで

記念館を見た後、バスでプラハの街に戻ってきたのですが、ホテルに戻る途中、旧ユダヤ人地区の方へ行かれる方に便乗して私も途中下車しました。

そして、奇遇にもS.A.さんとご一緒して、前日に行けなかったプラハ城の方へ向かいました。(旧ユダヤ人墓地などへは、二人とも前日に行っていたのでした。)

プラハ城は街から見て、橋を渡った向こう側の山の上にあります。

行きは途中下車した近くの橋をわたり、電車で登り降りし、帰りは有名なカレル橋を渡って帰ろう！とわくわくしながら電停まであるき、電車に乗り込んだところ、電車を間違えました。

素敵な町並みに惚れぼれしながら電車の窓から外を眺めていたのですが、いっこうに山を登る気配がなかったのです。

結局、親切なお姉さんに助けられ、無事にお城にはたどり着くことができましたが、今旅、2度目の‘Where is here ?’でした。

おかげといいますが、観光客があまり行かないような場所の雰囲気をも堪能することができたのはある意味貴重な旅でした。

そして、やっとこさたどり着いた山の上から見る景色とアイスの味は最高でした。

時間も迫っていたため、お城の外観だけ見て、カレル橋を渡れず；近場の電車と(かなりの)急足・・・を超えて、ゆったりと時間の流れるプラハの町並みの中、ダッシュでホテルまで帰りました。

(A.S.記)